

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第三十六号 (二〇〇九年五月)

風に吹かれて (09 5)

白井啓治

『何だか心寂しい里の春』

ことは座、4月定期公演の少し前の事であった。女優の小林さんに、6月の公演は何をやるうかが、と話していたら菅蒲沢の先、小野越にある北向観音に、小野小町が姿を映して見たという池があるけど…と言われた。それで、6月公演では、古今集に収められている小野小町の歌を軸に、脚本を書こうと決めたのであった。そして、公演が終わる北向観音を小林さんと訪ねたのであったが、姿見の池を眺めているうちに、滋賀県大津市の寺にある小野小町百歳像のことを思い出し、急に寂しい感情が生まれ、右の一行文を呟いてしまった。

小野小町は非常に謎めいた美人の歌人で、その伝説は日本各地にある。小町の墓も五、六か所にもある。朝日峠を越えた先には、小町の里があり、この里で小町が没したとされ、その墓もある。

旅に病んで…の芭蕉ではないが、小町も日本全国に旅したのかも知れないが、晩年にこの常陸国を旅することは考えにくい。百歳の小町像があるくらいは長寿だったのだから、百歳にもなるうという人が、どんなに健康体であったとしても、都から歩いてこられるはずもない。

また「卒塔婆小町」なる話も創られてあるのだが、百歳はどうか分らないが、その時代にあつては長寿という点においては、化け物のような人だつたに違いない。

中国では、妖とは七十歳代の女性、怪とは八十歳代の女性のことを言うそうで、小町はまさしく妖怪の上を行く化け物と言つていい。何よりも卒塔婆小町となつてもその妖艶さを捨てようとしなかつたのだから、確かにすごい。しかし、その分女の哀れ、寂しさを思わせてしまう。

仮に、小町が朝日峠を越えた小町の里と呼ばれる地に没したのであれば、かなりの高齢であつた彼女が、自慢の美顔を皮膚病に侵され、北向観音に治癒を祈願し、完治した顔は如何な？ と池に映して見たと想像すると、何んとも不気味な思いにさせられる。

しかし、この想像が真実に近いものであつたら、作家としたら矢張り卒塔婆小町のことを本気に愛して抱きしめてやりたいと思つ。人は何故生き続けようと願ひ、そのように行動するののかの一つの真実の答えを出してくれていると思つ。

北向観音堂に出かけるとき、小林さんには古今集にある小町の歌十四首と、舞の為の仮の現代語訳を渡したのであつたが、彼女が小町のことをどのように想像し、舞のイメージを創りあげるのか

は未だ分からないが、妖怪と称される年齢となりながらも、美貌の自尊心を持ち続け、艶麗なる言葉の舞を舞つ姿を演じてくれたら、と期待している。

ことは座の公演も6月で14回を数えることになる。そして常世の国の恋物語も二十一話になる。百話にはまだまだ先は長いが、その種は尽きることはなさそうだ。

本会の打田さんと良く話すのであるが、この常世の国には、本当に物語の種は尽きることなく存在している。しかも全部が豊穣の実りを結ぶ種ばかりである。現状の自分に都合の良い勝手を言わなければ、本当に素晴らしい実をつける種ばかりである。

この風の会の会報も今回で36号となり、丸三年を無事終えることになった。会員も先月松山有里さんが正式に入会されて七名となった。そして不定期ではあるけれど投稿頂いているギター文化館代表の木下明男さん、オカリナ奏者の野口喜広さん・矢野恵子さんご夫妻、斎書房の太田尚一さんを加えると11名になる。

ふるさとルネサンス塾の塾生であつた打田昇三さん、兼平ちえこさん、小林幸枝さんと始めた小さな集まりであつたが、三年が過ぎると、大した大所帯になつたものと感心する。

何事にも七五三説を唱える私にとって、先ずは最初の三年をクリアできたことは喜ばしいことである。あとは次なる五年に向けて自分自身を精進するだけであるが、ことは座の4月公演から、ギター文化館でふるさと文化市が始まつたり、他に幾つかの楽しみな事件の起こりそうな気配が聞こえ、嬉しく思っている。

「ふるさと文化市」始まる

松山有里

白井さんが昨年9月から農作業のお手伝いに来てくださるようになり、草取りは白井さんの仕事というくらい、一所懸命草取りをしてくださいました。まだ一人で農作業をしていたところで、気持ちの上でも大変助かりました。いろいろ畑で話をするうちに芝居と「市」が一緒にあるといいなあという話から今回のふるさと文化市が始まることとなりました。気が付けば代表世話人という大役を仰せつかり、身に余る大役と少々体が後ろにのけぞる感もありますが、実行委員のみなさんで楽しい時間を創りあげていきたいと思っています。よろしくお願いします。

私が名古屋にいたころに、博物館で「寄場（よせば）」（人の集まる場）の展示があり見に行きました。江戸時代の名古屋の殿様、徳川宗春が、停滞していた経済を立て直すために、寺社仏閣の境内などでも芝居や見世物を行ってもよいというおふれを出しました。名古屋の中心部に近いところに大須観音という観音さんがありますが、その境内でも毎週のように見世物や芝居などおこなわれたようで、そのようなことを逐一書き記していた人（すいません、名前がわかりません。）の資料を博物館で展示していたのです。何月何日、何時からどんな芝居があり、雨で延期になったとか、どこそこの見世物はラクダだったとか、とにかく細かいこともすべて書き記してありました。芝居が来れば人が集まる、人が集まれば市が立つ。これは自然な成り行きです。大須観音は今でもたくさんの方の集まる場所、しかもいろんなニュースをもつ人がこっそりたずねたり、また

はそのような人が堂々と表現活動のできる場所でもあります。いわゆる名古屋のアンダーグラウンド文化の中心地ともいえるのではないかと思うのです。

石岡の駅前のコーヒート屋さんで数年前にたまたま、ことば座の劇をみたときに（そのときはまだ「表現舎しゅわーど」と名乗ってらしたと思いましたが）なぜか、その大須観音さんの境内で昔行われたであろう、芝居を見たような気持ちになったのでした。数回前の公演から芝居の後に、八郷のアルハンブラとも呼ばれるギター文化館の前にむしろを敷き、野菜を売らせて頂くようになったのは、やはり大須観音のイメージがあつて、それこそ市が立てばいいなあという思いからです。

もうひとつは私が八郷の財産と想っている「おばさん」たちのことです。次回の市のときにはぜひ私の近所の住んでいらっしやるおばさんたちに野菜など売ってもらえるような算段をしたいと考えています。というのはそこでわたしたちがいろんな話をきくことができるからです。若い人は外に働きにいったら、畑をやっているのはみなさんは高齢な方ばかりで、何かとお世話になることが多いのですが、そのときに話してくれることがとにかくいい話なのです。目から鱗が落ちるようなこと、心の底から励まされること、美しい言葉、それはやはりこの美しい八郷が生み出した財産だと思つたのです。そのお話しとつひとつがすべてことば座でとりあげてもいいような物語です。

「私達の暮らしのあらゆる側面において精神的生話にかかわって創造されたものの総称を文化と呼びます。」と白井さんが書いていますが、まさにこの八郷がつくりあげてきた文化を継いで生きてい

る地元の高齢な方々に入ってきてもらって、そんな話をじっくり聴いてみたい、それもこの文化市でやってみたいことのひとつです。

他まだまだふるさと文化市でやりたいことはたくさんあるのですが、ひとつずつ積み重ねて、いずれはことば座の芝居の時には、ギター文化館が、雑多な大須観音さんの境内のようになるといいなあというのが私個人的な夢です。

実行委員の方それぞれが自分のやりたいこと、表現を市のなかで存分にやってみようのが一番だと思つたので、みなさんどんどんやりたいことを提案してやってみてください。そんなふるさと文化市です。実行委員も大募集しています。一緒に創りあげていく過程を楽しみたい方ぜひ参加してください。よろしくお願いします！

日本人は龍神好き…？

小林幸枝

日本全国、何処に行っても龍を祀る神社がある。龍というのは、中国から伝わってきた空想の動物？…なのだけれど、日本国中どうしてこんなに龍を祀る神社があるのだろうかと思つた。まだ子供だった頃に、お婆さんから動物達を虐めたら龍神さんの罰が当たるよ、と言われ、龍なんか昔話にしかないヨ！と悪態をついた事を覚えている。

龍神さんは、雨と水をつかさどる神さまだそうだから、中国から渡来して直ぐに日本中に広がって、暮らしに必要な色々な伝説を創造しながら現在にいたっているのだろう。

龍はまた海の神さまとも言われているので、その所為もあって日本中に祀られるようになったのであろうか。でも不思議なのは、龍神が祀られているのは、全部神社であるというのはどうしてなのだろう。お寺にも龍の彫り物等が沢山あるけれど、龍が直接神として祀られてはいないと思うのだけれど。

日本の各地にある龍神伝説は、そのほとんどが水に関係している。沖繩に行った時、首里の近くの瑞泉門の前には龍樋とよばれる湧水の池があった。石岡のシンボルである龍神山にも龍神社が祀られてあり、どんな旱の時でも涸れたことのない湧水がある。

大雨で川が氾濫すると、龍が怒って暴れたという伝説も各地に残っている。本当に日本人は龍が好きなんだと思う。

でも、この石岡もそうだけれど、現代の日本人は龍を大切に考えていないように思う。そのうちとんでもない龍の怒りがくだされることになるかも知れない。

私達は、いろいろな伝説にかりて、もっともつと龍を大事にしなければならぬと思うのだけれど、現代日本人には龍は必要なくなってしまったのだろうか。

ことば座で、龍の怒りを鎮める優しい村娘「風貴」の話の演じたけれど、龍の怒りを貰わぬように、もっと龍の伝説の底に流れている、人の暮らしに必要な真実についてを学び、活かしていかなければならぬ、とちよっと生意気に思ってしまった。

歴史ガイドに同行して(11,2) 兼平ちえこ

昨年(二〇〇八年)四月、五月、六月(各月一回)に渡って「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く」会の皆さんへのご案内に同行してのご紹介も今月より二年目に入りました。

健康増進と歴史探求を兼ねての豊かな人生を送られている皆さんに熱いエールをお送りしながら、そして多くの方々に「歴史の里いしおか」に出会ってほしいと願いつつ、今回は前月の常陸国分増寺跡内のご案内できなかった旧千手院山門、国分寺鐘伝説についてご紹介しましょう。

・旧千手院山門

市指定有形文化財(建造物)昭和五三年九月指定。千手院は菩提山来高寺と称し、国分寺の東方隣接の地にあった。弘仁九年(八一八)行基菩薩の法弟、行円上人によって開基、以後千手院住職、十一世心宿上人が、建長四年(一二五三)の没するまで続いたと伝えられる。その後の記録はないが、天正元年(一五七三)に、京都東寺の禅我大僧正の法弟、朝賀上人によって中興されたといわれる。朱印地十石、末寺二ヶ寺、門徒二ヶ寺、又門徒二ヶ寺、これら千手院末の寺院は、その大部分が府中(石岡)の町にあり、人々の信仰を集めていましたが明治初期の廃仏毀釈運動や本山の末寺統合策等により、その多くが廃寺となっていた。こつして千手院来高寺も大正八年(一九一九)現在の国分寺と合併して廃寺となり、現在ではこの山門が国分寺境内に残るのみである。その質素な趣のある瓦葺きの旧千手院山門には幕股(かえるまた)といわれる部分に、珍しい彫刻が

施されています。一見すると見る人を恐怖させるこの情景には、全く逆の意味が隠されています。恐ろしい驚は慈悲深い観音様の化身であり、弱弱しい猿は煩惱に身を焦がした人間の姿を現しているのです。欲におぼれて奈落の底に転げ落ちようとする猿を驚に早変わりした観音様がすくい上げるといふまさに救済の図なのだそうす。

茨城県文化財保護審議会として重責を果たされた建築文化振興研究所の一色史彦先生は、昭和六十三年に、山門の修理工事の監理を依頼され、その一年前にこの恐ろしい情景の彫刻が示している本来の意味を知ったそうです。「茨城の古社寺遍路・上」一色史彦著・斎書房出版)またこの時の修復で門建立の年号が判明しました。寛保三年(一七四三)国分寺の僧侶、深恵がこの門を建て、明和四年(一七六七)に弟子の宿恵が瓦葺きに改めたという内容の文字が屋根の小屋組に墨で残されていたのです。

どうぞ深緑に包まれた境内を散策しながら観照のことお薦めいたします。

・国分寺鐘伝説

仁明という天皇の承和という年号の最初の年だと書いている書物があるそうで、ある天気の良い日、子生(こなじ)の浦(旧鹿島郡旭村子生)という海の上に、ぽっかり二口の釣鐘が浮んだという。それを見つけた漁師は驚き、「こんな重い釣鐘が浮ぶはずがない、それも二つもよ」としばらく考えた漁師は「そうだ、龍宮の女神さまが、何処ぞのお寺に寄進なさるにちがいない」と気づき、浜の漁師仲間を全部呼び集め、総がかりで釣鐘を浜辺に引き上げた。さて、寄進先のお寺はこの

寺だろつと皆で考えた。すると一人の漁師が「そ
うだ府中の国分寺だ」と叫んだ。大勢の漁師たち
も「そうだ、そうだ」と府中の国分寺まで運ぶこ
とになり、太い縄をなつて二つの釣鐘に巻きつけ、
大勢で引き出した。随分と骨がおれた。一日、二

日と釣鐘引きが続き、旭村の中間の大きな原にや
つとたどり着いた時は、すでに七日ほどたつてい
た。そこでこの原を「七日つ原」と呼ぶようにな
り、八日目には旭村田崎の堤にたどりつき、ひと
休みした。その堤のある所を「八日堤」と名がつ
けられた。八日堤からは二台の車に積んで運ぶこ
とになり、重い車を引きだしたが、田崎地内の所
に差しかかると突然車の心棒が折れてしまった。
そこでこの橋を「こみ折れ橋」と呼ぶようになり、
今でもこれらの地名が残っているという。このよ
うにしてやつとの事で、府中の国分寺につき、目
出たく雄鐘、雌鐘の二口の釣鐘が鐘楼に吊り下げ
られたという。

ところがある夜、この釣鐘に目をつけていた大
力の大泥棒が鐘楼から釣鐘をはずし、これを背負
つて、高浜街道を通り、霞ヶ浦の岸辺にたどりつ
き、その釣鐘を舟にのせて沖に向かって漕ぎ出し
た。舟が三又沖に（霞ヶ浦大橋辺り）の手前まで
くると、雷も鳴りだし、大嵐になり、さすがの大
泥棒もさきに進めずどうしようと思案していると、
舟に積んだ釣鐘が突然「国分寺、雄鐘恋いしやポ
ーン」と鳴りだした。これには大泥棒も驚き「こ
の急な時化ようは、きつと釣鐘を盗んだ罰だ」と
気がついた大泥棒は恐ろしくなり、釣鐘を三又沖
めがけてほうりこんで、舟を漕ぎ去つたという。
それ以来、三又沖に沈んだ雌鐘は明けと暮れには
「国分寺、雄鐘恋いしやポーン」と鳴るといふ。

そして毎日、米つぶ一粒分だけ岸によさつてくる
が、波や時化のために引きもどされて今だに岸に
着けないでいるという。この伝説はJR線 石岡
駅下りホームに壁画となつています。

また、盗まれた釣鐘については、寛永年間（一
六二四～一六四三）に、当時、府中領主の皆川山
城守が表川（恋瀬川）の両堤を構築するとき、人
足の懸け引きを合図するため、国分寺の雌鐘を使
用し、寛永十五年、堤は完成したが、鐘を寺に返
さずそのままにして置いたため、盗難にあつたの
だという記述もあります。

そして「常陸国分寺たまげた伝説」の中の「禁
断のつりがね」と題して、その昔、国分寺には雌
雄一対の名鐘があつた。ところが江戸時代の初め、
雌鐘が盗まれ舟で運ぶ途中の嵐で、三又沖に沈ん
でしまった。今から三百年ほど昔のこと。その話
を聞いた光圀公は釣鐘をとりもどそうと、力自慢
の数人の男を集め、娘たちの髪で太い毛綱をより、
湖面に舟を出した。やつと水面にあらわれた釣鐘
のなんとも物悲しい姿に、ハツと息をのんだ瞬間、
結ばれた毛綱がほどけて、釣鐘はふたたび水中へ
と沈んでしまった。それからたたりを恐れてか、
釣鐘に触れるものはいなかった。

最後に国分寺の梵鐘は「仁明天皇御宇、承和元
年甲寅三月雌雄二口、東海より出現」と伝えられ
ているが、遠く海を渡つて、百済から来たものら
しい。直径一・〇六メートル、高さ一・七八メー
トル、厚さ一〇・六センチ、重量一三二キロ。雄
鐘は鐘楼が痛んだため、仁王門に吊つておいたが、
明治四十一年の大火に仁王門と運命を共にしてし
まいました。

如何でしたか、色々な伝説として語り伝えられ

ていますが、皆さんの心の中でありし日の釣鐘の
音色の余韻を偲んで下さい。また次回も国分寺境
内周辺のご案内をご紹介します。

参考資料・石岡市史(上)、いしおか一〇〇物語

・シルクロードに座占めて 我の樹
・ゴビ砂漠 泉溢るる 果物のふるさと

敦煌にて ちえこ

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡 2 1 5 8 6
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

我々人類の最初の祖先は、700万年前、チンパンジーと枝分かれし、直立2足歩行をはじめた「サヘラントロプス・チャデンシス」という小さな猿人であったという。2002年アフリカ中部のチャドで、国際調査団がその化石を発見した。

化石人骨は今日まで、9種類発見されているが、多段のバージョンアップを重ねて、今日の我々、ホモ・サピエンス」に至ったと考えられている。

単純計算をすれば、改訂版の新種が登場するのに、平均78万年かかることになる。170万年も永続したアウストラロピテクスもいたし、わずか27万年前のネアンデルタール人もいた。

このように、進化とは、超スローモーであるが、決してある目的に向かって一直線に定向進化するものではなく、行き当たりばったり、環境の変化に応じて、うまく適応したものが生き残れる。

その適応進化であるが、人類も今日に至るまで、幾度も滅亡の危機に曝されながら、体型・機能・頭脳等を変換し、生き残ってきた。しかし、大脳を異常に膨らまし過ぎた人類は、「欲望」も膨らまし過ぎ、今やその暴走に、歯止めがかからない。

さて人類の祖先は、直立2足歩行を始めた頃は、大脳容積は、500ccに満たなかった。それから500万年間に150cc増えたのみで、石斧など100万年も、ほとんど変化をしていない。

ところが、今から40万年前、我々現生人類を生み出したアフリカの原人ホモ・エレクトウスは、意図して「火」を用い、急速に栄養改善がなされ、驚異的に大脳容積を増す。

【火の使用の起源については、諸説があるが、

200万年ぐらい前の獣骨化石に、焼けた跡が残されている。しかし、これは山火事などによるものか、人類の手によるものかの判別ができない。】火の使用が始まった40万年前、ホモ・エレクトウスの大脳容積は900ccであったが、栄養改善され、躍動感にあふれた原人は、今から30万年前、突然変異を起こし、ネアンデルタール人を生み出す。ネアンデルタール人は、旧人と言われ、ヨーロッパ方面に進出し、殆ど肉食（骨の分析で今それがわかる）で、強力な骨格を持ち、大脳容積は現生人類より200ccも多い、1600ccとなった。死者に花を供え、丁寧に埋葬する文化も持っていた。しかし何が原因か分らないが、今から3万年前、突然この地上から、その姿を消す。種としての寿命は、わずか27万年であった。

【体重に対する脳重を、他の一般哺乳類に比べると、チンパンジーは約2倍、人類は6倍である。

また、大脳容積の増大は、即、文明の発達を意味するものではない。しかし現生人類に今日の繁栄をもたらした原動力は、言語や道具の発達を抜きにしては、考えられない。その言語や道具の発達を推進させたものは、大脳の急速な発達によるものである。なおヒトの大脳は、140億個の神経細胞と、その他のグリア細胞などからなる。大脳は、静止中の筋肉の16倍ものカロリーを消費し、酸素とグルコースを大量に必要とする。】

ネアンデルタール人や現生人類ホモ・サピエンスを生み出した化石人類ホモ・エレクトウスは、その前の化石人類アウストラロピテクス・ボイセイのような、頭骸骨の頭頂部に、顎から伸びてきた側頭筋（咬筋）を付着させる「矢状稜」という骨の突起はない。この突起は、繊維質の固い食べ物

を噛み砕く、強力な筋肉を付着させるためのものである。ホモ・エレクトウスは、火の使用により、食べるものが柔らかくなったため、強力な咬筋は必要でなくなった。顎からの筋肉が付着する「矢状稜」がなくなると、大脳は、上から押さえつける強力な「蓋」が薄くなったので、しかも火を通じた消化しやすい栄養供給が豊かになったので、一気に大脳容積を増加する。即ち人類繁栄の最大の要因は、「火の使用」の開始と私は考えている。

【ちよつと余談になるが、脳味噌が多ければ頭が良いとは限らない。大脳が1800ccの知的障害者もいたし、1921年のノーベル文学賞受賞者のアナトール・フランスは、火を用いる前の原人とほぼ同じ、1000ccであった。】

さて話を戻し、ネアンデルタール人が誕生した後、わずか10万年前（今から20万年前）、ホモ・エレクトウスは再び突然変異を起こし、我々新人ホモ・サピエンスを生み出す。我々は、ネアンデルタール人の10万年後輩の弟分である。ホモ・エレクトウスは火を使い始めて、わずか20万年前に大脳容積を200ccも増やし、1100ccとなり、益々躍動感にあふれ、突然変異を連発したことになる。以後ホモ・サピエンスは現在に至るまで、わずか20万年間に大脳容積を300ccも増やし、現在1400ccとなった。

以上の話からも分かる通り、急速に大脳容積を増やしたネアンデルタール人の種としての寿命は、非常に短命であった。その理由については、今、学会で盛んに議論されている。後発の我々新人と、数万年間、同じ地域で生活したが、特にこれといって争いがあったという証拠もないし、さりとて、仲良く混血したという証拠もない（化石のDNA

解析から混血は否定されている。

【種の寿命に対し、個人の寿命の件だが、近年「長寿の遺伝子(Sir2)」が発見され、多くの長命者はこの遺伝子を持っている。しかしこの遺伝子がなくとも長寿の人もいる。最近の報道で沖縄県に、兄弟姉妹7人の平均年齢が89歳の家系が紹介されていた。全員元気で、子供36人、孫ひ孫合わせて160人。両親は96歳と94歳で亡くなっているという。調べた結果この7人は、いずれも長寿の遺伝子を持っていたが、朝から晩までよく体を動かし、雑穀・イモ・小魚などを多く食べるといふ。一方長寿の遺伝子を持っていても、運動量が少なく栄養過剰の人は、長寿遺伝子はブロツクされ、決して長寿にはならないという報告もある。かつて沖縄県は男女とも長寿日本一であったが、現在は26位に下がったという。理由は、米軍関係で働き、肉食など米国式食事習慣者が多いせいではないかと云われている。】

さて、急速に大脳容積を増やしたことは、何か寿命を縮める要因にでもなったのであろうか。本来、草食動物であった人類が、肉食主体の食生活をするようになると、寿命に影響があるのであろうか？ 兄貴分のネアンデルタール人と寿命が同じと考えたら、我々弟分の種としての残り寿命は、あと7万年ということになる。未来学者は、我々現生人類の残り寿命は、良くてもあと100万年、環境破壊がそのまま進めば、1万年さえ、危ういとも言っている。どうせ、後一〇億年たてば太陽輝度は急速に上昇し、地球に生物など、とても住めなくなる。

ならば地球脱出を図るか？ この狭い天の川銀河系内だけでも他の恒星に、地球並みの生物が生

存できそうな惑星は、100万個ぐらにはあるはずという。そのいずれかにも生生物がすでに誕生しておれば、この地球より100万年や1000万年ぐら先をゆく文明をもつ知的生物が、すでに存在しているもおかしくはない。それなのに、NASAなど懸命の探索にもかかわらず、UFOの来訪どころか、人工的な電波ひとつ受信できないという。ということは、知的生物は母星を飛び立つほどの文明が発達する頃には、必ず滅亡するという、宇宙には普遍的な原則のようなものがあるのではないかとさえ言っている人もいる。

他の恒星の惑星はともかく、わが太陽系の近隣の惑星はどうか？ 日射量の多い内隣の「金星」は、二酸化炭素が95%、大気は91200ヘクトパスカル(hPa) 気温470 の熱地獄である。金星のような、荒廃した地球など考えたくもない。金星は明けの明星・宵の明星・一番星などと、遠くから眺めてこそロマンチックな星だ。

さればとて、外隣の「火星」にすら移住できるのか？ 火星の大気は非常に薄く5~7hPaである。薄い大気の中で酸素は、0・13% (地球は21%)、水蒸気は0・03%しかない。平均気温はマイナス33 だが、大気が薄いため、昼と夜の温度差は100 もある。とても人類が定住などできる環境ではない。移住など余計なことは考えずに、これ以上の環境破壊にストップをかけ、この惑星(ほし)に永住することを覚悟すべきである。種としての残り寿命はあと何年であるにしろ、66億人の全人類は運命共同体として、この地球を守りながら膨らみすぎた大脳が、これ以上、強欲をツツパリ通さぬよう、全知全能を傾けて、大脳の暴走を阻止していかねければならない。

種の寿命に関連し、最近、若い男性の精子に、異常が極度に目立つといわれる。最近5年間に、フィンランドの若い男性の異常精子(数・活力・奇形など)が、27%も増えたという報告がある。世界各地に、同様な現象が多数みられるという。人間が作った性ホルモンと類似の環境ホルモン(内分泌攪乱物質)がおそらく犯人であろう。それに加え、地球温暖化、水や空気の汚染、資源枯渇、核兵器の蓄積、新しい強力な感染症など、人類破滅につながる悪条件が目白押しである。

現生人類が、これら多くの問題を抱えた原因は、一体何であったのか？ 単なる人口過剰による張り合いなどが原因だったのか？ 私に言わせれば、それは、欲望の過剰が、工夫改善を生み出すための大脳発達を促進する。発達した大脳は、益々強い欲望を生み出す。イタチごっこだ。

「必要は発明の母なり」といわれる。欲望を満たすためには、限られた資源には限界があるので、持続可能なエネルギーなど新境地を開かなければならない。先進国が世界の資源を過剰に浪費し、発展途上国や未来の我々の子孫が使つべき資源を、根こそぎ使い果たそうとしている。

【大脳の急成長は、文明の急成長をもたらした。文明の急成長は地球環境の破壊につながった。大所高所から物事を眺め、子孫の平穏な暮らしを願うのであれば、文明発展のスピードを緩め、スロウライフに変換すべきだ。大脳の暴走は、すぐにもストップをかけなければならない。】

大脳がその容積を増して、人類は一体何をなしてきたか？ 神の概念を生み出し、宗教が発達し、集団が巨大化し、国家が生まれる。文明が栄える。多くの芸術や科学や機械文明も栄える。それらが

益々人類の繁栄をもたらさし、人口は過剰なまでに膨らむ。2050年には100億人を突破しそうだという。宇宙船地球号は、満員状態となる。

人口が過剰気味になると、当然自由度が狭くなり、近隣と諍(いさか)いを生じる。貧富の差も生じる。欲の深いものは、何もかも一人占めしようとする。そうはいかぬと、貧しい者も黙ってはいない。人類の歴史を振り返ってみれば、小は近隣の小競り合いから、大は国家間の大戦争まで、戦(いくさ)のない時代など、ほとんどなかった。大脳肥大が強欲をもたらさし、強欲は暴走する。

それでは、暴走し続ける大脳は、これまで世界各地でどんな悪事を果たしてきたか？ 次に掲げる項目は順不同だが、思い当たるまま……。

1・植民地政策 ある地域で人口が増えていくと、欲張りな者は、近隣から、かすめ取るだけでは物足りなくなり、遠く、いずこかに資源なり、宝物があれば、それを奪いに遠征するようになる。産業革命で蒸気機関が発達すると、遙か大陸を超え、遠隔地にまで足を延ばす。原住民を蹂躪し、虐殺し、宝を奪う。南北米大陸・アジア各地などで、ヨーロッパ人が世界中を荒らしまわった。特に南北米大陸では9000万人の原住民の90%も謀殺したという。残ったものは奴隷にされた。北米で西部開拓とかフロンティアスピリッツといえはカッコーいいが、アフリカから黒人を拉致三昧物として貨物船で運び、奴隷市場で競売をする。奴隷なくして西部開拓は進まなかったのである。第16代米大統領リンカーンはその奴隷解放を掲げたたちまち暗殺された。文明の進んだ、即ち略奪を意志決定した暴走する大脳が悪事を重ねる。一方我が国をみると、かつて歴代朝廷は、東北

地方で平穩に暮らしていたアイヌの末裔である先住民を再々襲い、破壊し、強引にその支配下に置こうとした。大陸からの難民として流れついた弥生人の傀儡どもである。国家統一のもとに、朝廷を取り巻く者供の画策で、坂上田村麻呂や源義家親子などが、楽園浄土の東北地方を踏みしめた。歴史書は戦に勝った者に都合よく書かれている。

2・世界大戦 先進国が未開地を襲うだけではなくて、先進国同士でも覇権争いをする。欧州大戦(第一次世界大戦)に次いで、太平洋戦争など。

私など幼少で戦争の残酷性を、実体験はしていないが、戦後の混乱や窮乏生活から凡そのことが分かる。一家の大黒柱を戦争で亡くした家族の悲惨な生活をしみじみと見てきた。赤紙一枚で戦地に駆り出され、親や子供や、或いは新妻を残して、ムシケラのように人の命を消耗品扱ひする。

何が皇国のためだ！ なにが大君のためだ！ あのような凶暴な意思決定をする大脳とは、一体どのようにして培われていったのか？ 似たようなことが21世紀を迎えた今日でも、なおかつ平然と行われている国もある。300万人も餓死し、3万人もの政治犯が処刑されたというすぐ隣の国では、拉致・麻薬・偽札など国家が関与し、更に大量破壊兵器を振りかざし、それを廃棄しろというなら、それに見合う食糧・エネルギーなどをよこせ……と脅しをかける。正に狂気の沙汰だ。

一方大變文明の進化した国を自称する大國など、前例に劣らぬ凶悪な意思決定をしている。それは超巨大破壊兵器である原爆投下や、枯葉作戦の実行である。クラスター爆弾の禁止条約にも真っ先に反対した。全人類を何回も殺せるだけの核兵器を、ドッサリ蓄えている。残酷な生物兵器もタン

ト蓄えている。アウシュヴィッツ、ルワンダ、ポルポト政権によるカンボジアでの170万人の虐殺。夢想するだけでも恐ろしい。それを決断・実行した大脳の暴走は決して許されるものではない。

3・狂乱市場 世界の誰が困ろうが関係ない。ただ俺だけが儲ければそれでよい。先の原油価格や穀物価格の暴騰などはその例だ。先物市場など操るヤカラこそ凶悪犯だ。そして、金融機関は破綻し、世界に恐慌を及ぼす。100年に一度の恐慌などといわれるが、今時は一國の事件に止まらない。多くの失業者を生み、自殺者を生む。自由競争こそ資本主義経済の発展原動力などというが、誰かが自由になるといふことは、その分、誰かが不自由に陥られることとなる。狂乱市場は、野獸を街に放したようなもの。政府なり国連なりが、しつかり野獸に首輪をつけ、コントロールしなければ、狂乱は繰り返す。

4・自然破壊 人類を育ててくれたこの自然を、自分の利益のために、子孫のことも考えずに破壊しつくす。今の今、俺だけが良ければそれでよし。人類とはこんなにも浅はかなものであったのか。環境が破壊されれば、子孫どころか、今の今の自分達さえ健康な暮らしがおぼつかなくなる。資源の枯渇も遠の昔から危惧されていた。根こそぎ奪い取り、いくつもの動植物が絶滅していく。化石燃料など、後何年もつことやら。持続可能なエネルギー開発に全力を尽くすべきである。

こんな暴走する大脳に、叡智をもってストップをかけなければ、人類の未来に栄光はない。人類が、奢り高ぶって『万物の霊長』などと自らを高い位置に据え置きたいのならば、馬や鹿から『なんだ、あいつらのやり方は？』と、後ろ指さされ

ないよう、自らを律する必要がある。それができ
てこそ、大脳をこんなにも膨らました価値がある。

* * * * *

本会報第33号で述べた「過去を引きずって」
の中で、重要なことを書き漏らしたので補充する。

1* 未熟児出産 700万年前人類は、直立
2足歩行を始めたために、「骨盤」が小さくなり、
骨盤腔が狭くなった。すると当然の結果として、
胎児は十分な発育ができない。草食動物など、生
れ落ちたらずく親と一緒に歩けないと、肉食獣の
餌食になる。故に十分に発育してから生れ落ちる。

ところが人類の胎児は、生まれたらすぐ歩ける
ほどに育つためには、胎盤腔が狭すぎる。更に、
大脳が大きくなったため、大きな頭が、産道通過
を困難にする。そこで人間の胎児は、未熟なまま
で生まれ落ちることとなり、生後に、非常に長い
保育期間をかけて、成長することとなる。生殖年
齢に達するのも長時間要することとなる。そして
人類は、ネオテニー（幼形成熟）と言って幼生形
のまま性成熟し、生殖するようになる。

親にとつて、子どもが、いつまでも親の手から
離れない大きなリスクは、直立二足歩行を始めた
太古の昔に、その遠因がある。

2* ひざ関節痛 四足の普通の動物は、通常
前足が全体重の3分の2の負荷を負う。後ろ脚は
推進力を主な業務とし、体重負荷は3分の1であ
る。ところが人類は、直立し、前足は自由な手と
なったため、体重負荷は、すべて後肢二本が支え
ることとなった。四足なら本来、後ろ脚一本にか
かる体重負荷は6分の1であったはず。仮に体重
60kgの人なら後ろ脚一本は、10kgを負担すべ
ばよかつたはず。それが二足歩行になり、脚一本

は、全体重の2分の1、即ち30kgを背負うハム
となった。当然そこには無理を生じ、関節への負
担は増加する。腿（もも）側の大腿骨と足首側の
脛骨の骨端は、関節腔で囲まれ、軟骨がそのクッ
ションの役目を果たす。ところが加齢とともに、

この軟骨がすり減り、両骨端がジカにぶつかりあ
うようになると、激痛が走る。0脚の人ほど、両
骨端は平行でないのので、関節腔の中でモロに骨の
端がぶつかり合う。これも悲しいかな遠いご先祖
様が、二足で、立ち上がったツケなのである。

3* ヘルニア これも直立歩行などのために、
腹腔内の圧力が高まり、腹腔から外部に臓器が飛
び出す現象である。

膈ヘルニア 重い物を持ち上げたり、異常
緊張や強い咳により加圧されると、膈から、小腸
などが腹腔外の外へ飛び出す。

鼠蹊ヘルニア これが最も多い。腹壁筋肉
の弱い鼠蹊部から、小腸などが飛び出す。

椎間板ヘルニア 椎間板とは脊柱の前方部
分を構成する椎体と椎体の間をつなぐ軟骨で、こ
れがすぐ後方を走る脊髄神経を圧迫するために痛
みが走る。腰椎に多く、坐骨神経痛となる。

4* 五官の退化 人類は、動物が生きていく
基本的な五つの感覚がことごとく低下し、その分
を、人類は大脳を膨らまし、代替的に補ってい
る。しかし野生動物に比べたら、五官の鋭敏さは、
著しく劣っている。よくぞ今日まで生き延びた。

まず 視力だが、ノスリはヒトの8倍の視力が
ある。コウモリの 聴力は超音波を感じ、象は地
震の超低周波を感じし、先のインド洋津波を免れ
た。人類の 味覚は著しく低下し、毒キノコを弁
別できない。毒見役も殿様も、オメオメ毒物を食

べさせられた。嗅覚に至っては、イヌはヒトの
10万倍の能力を持つ。おまけにヒトのフェロモ
ン機能は、胎児のうちに退化した。そして最後、
皮膚の 触角は着物等のせい、ほとんど麻痺状
態。空気の微細な振動など全く関知できない。
このように、動物の基本的な五官が著しく低下
退化した人類は、果たして今後、何万年生きられ
るのか?……。因果の恐ろしさを感じる。

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

6月 7日	佐藤純一	ギターリサイタル
6月28日	高橋竹童	津軽三味線のひびき
7月12日	大萩康司	ギターリサイタル
7月26日	大島 直	ギターリサイタル
9月 6日	村治奏一	ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

思いを表す素晴らしさ

伊東ヨシ

人は、自然・人・物など多くのものと係わりをもつて生きている。毎日、いろいろな係わりを持つ中に、いろいろな思いを重ね合わせて生活している。そして、その思いを伝えたいと思つとき、その表現には泣く、笑つ、怒る、を始めとするいろいろな形のあることを知らされる。

最近、思いを表にあからさまに現さない表現もあることを、改めて思い知らされた。その事を知つたのは、友人のお父さんの話を聞かされたときであった。

それは二十年前に遡る。友人の父親が死んで暫くぶりに山掃除に行った時のことだという。

そこは小学一年生になった時から爺ちゃんと親父と行った山だ。通りに面しているが急で、登り降りには一苦労。なだらかな所はごく一部で山全体が東側台地の斜面という所だった。勤めについてからは偶にしか手伝わなかったから親父一人では能率も上がらなかつたろう。それに薪木を必要としなくなつてからは、掃除する張りあいが無い」と言つていたのを思い出す。

とても荒れていた。俺も定年になつたら本格的に山掃除するつもりだ。あと十年、その間は少しづつやつていこうと考えるながら歩いてきた。

山桜の花びらが草や木の新芽に散つてきた。伸び放題の篠笹をかきわけながら歩いてきた時、山桜の根本に立っている物が目に入った。大部傷んでいゝが木彫の佛であった。人の手で作られたものだとしてわかつた。観音様の姿をしていた。何故此処にあるのか。誰が何の為に作つたのかと

驚くばかりだ。昼飯を食つのはいつも此処だったからまちがいない。目にしたことはなかつた。遠い日のこの山の賑わいと優しい観音さまの中にさち(親父の従姉妹)さんが忍ばれた。さちさんは俺が中学の頃から山には来なくなつた。その頃、嫁にいつたのだった。十年位たつて俺が結婚してまもなく向こう場のお爺(さちさんの父親)さんが亡くなつた。勿論さちさんも来ていて忙しく動いていたが、気のせいかどこか弱しく見えた。

野辺のおくりもすんで忌中掃いの席についた。親父に、帰りは俺が運転すつからよばれる、と勧めたが一口、二口がやつとだつた。落着かない様子でさちさんの姿を目で追つていた。その表情は暗かつた。

帰る時さちさんは門のところまで送つてくれたが、親父がさちさんにかける言葉のひとつひとつには体を気遣い、心配するものがあつた。「さちさん、体きつくねえか。顔色よくねえよ」さちさんは慌てて否定するように

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)

(1000円)

菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価：5000円)

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)

(二冊組：1000円)

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価：5000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」 (定価5000円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)

白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組：800円)

近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組：800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2(白井方)

電話 0299-24-2063

「親との別れだもん、にこにこしている訳にはいかねえよ」

「うん、でもな、あっちでは大事にしてもらってつか」

「大事にされてるよ。奥さんだもん」

「きつい時は言えよ。こっちの兄んちゃんも手伝いに行くからな」

「ありがとね」

「旨い物食べろよな。四十九日、百日日にはくつから、必ずこうよな」

口数の少ない親父が随分話をしていた。俺にはあの時の親父の必死な声が耳に残っている。

帰りの道中は無言だった。庭先に車を止めたまま星を見ていた。俺は、心配しすぎじゃないかなと思った。

やがて薪木からガスに変わっていったが「風呂は薪で焚くのがいい」と山仕事に出かけていった。枯木の伐採、運び出しは力仕事が多いので一緒にした。雨の日は物置に入りどおして何かしていたと御袋が話してくれた。何をしていたのかはわからない。鑿が置いてあるのを見たことがある。何か彫り物でもしているのだろうとおもう位だった。家の婆ちゃんの一週忌に向こう場の兄さん夫婦が来てくれた。その席でさちさんの具合の悪い話を聞いて親父が声を荒げていた。

「大きい医者に見せたのか。なんとかかねえのか」

あの観音さまは、あの頃親父がさちさんの回復を祈って彫った物だと直感した。まもなくさちさんは亡くなった。山桜の散る頃だった。その頃から親父は一人で山へは行かなくなった。俺が声をかけると重い腰をあげて出かけていった。山仕事

をしなから親父は何を考えていたんだろうか。

今こうしても山へ来ると皆が元気だった日のこと、山がいきいきしていた頃のことをおもいだす。

向こう場の家は婆ちゃんの実家だった。俺が初めて行ったのは終戦直後だった。あと取り孫の七つの祝いだから婆ちゃんは自慢気だった。バスを降りて歩いた。今おもうと大分遠い道程だ。石ころ道を下駄で音がどこまでも続く。滅多に通らない車が一台行くと埃がひどかった。

「目つぶれ。息すんな」

と後ろから怒鳴る。祝いの餅が重かったんだろ。婆ちゃんはおくれぎみだった。

この山へ来たのは一年生になってからだ。家には山がなくて困っていたので婆ちゃんの嫁入り道具として山を呉れたそうさ。この山へは爺ちゃんと親父と俺が舟二艘で川を下ってきた。向こう場の爺さん、父さんの男の子二人（俺より一つ上と一つ下）の男七人の山仕事の始まりだった。俺の家の為に人手を出してくれて、時間をかけて薪木を作りだしてくれた。今おもうと本当に有難いことだった。大人達が仕事をしている間子供は遊びと喧嘩が主だった。それでもお茶の用意（湯をわかす火もつけた）と片付け、田圃からの水汲みと子供の仕事はちゃんとやった。昼には向こう場の姉ちゃん（さちさん）が御数や新香を持ってきてくれた。それぞれ用意してきた握り飯を広げ摘みっこして食べた。姉ちゃんがいるだけで何十倍も賑やかになった。話をしてくれたり歌を唄ったり楽しかった。

「さちさん、そろそろ嫁に行く年齢だな」

「あーら」

「いい人はいんのか」

「いねえよ」

そういう時の姉ちゃんは恥ずかしそうだった。顔全体が桃色になった。薪木が纏まると荷車で川まで運び、舟に積んで親父が川を上って行くのが常だった。親父は戻ってきて、夕方は二艘の舟いっぱいに積んで帰って行く。再従兄弟達と大声で叫びながら別れた。俺は薪木の上に寝そべって遠くの家や夕陽を見たり、鳥の声や波の音を聞いていた。小学校も上級生になると一ぱしに扱われ山仕事をした。茶の用意、片付けは一人づつ当番でやった。姉ちゃんが嫁に行く日も近くなって淋しい気持ちだった。

「さちさんも嫁に決まったとか。よかったな」と親父が言い出した。


「望まれていくんだ。あまり頑丈でねえことは話してあつから無理しなくてもすむべ。百姓は大きいのが野良はしねでいい。家の中のことだけと言ってくれてっから安心だ」

「そうか、そんならいいけどな」

「山仕事もさちさんがなくなると淋しくなんな」

「婆さまらに来てもらうつか」

と皆で笑っていた。その頃までは汗をしっかりと流し山が賑わっていて楽しい時だった。結婚式には爺ちゃん婆ちゃん、親父御袋総手でよばれた。夜はさちさんの話に花が咲き、祝いの折りを食べれた。さちさんの幸せを皆で喜んだ時だった。俺が高校の頃には親父はトラックを購入し、それで行くようになった。山仕事は親父と二人でした。爺ちゃんは向こう場の家でゆっくりしていたようだ。やがて農家の生活も変わっていった。ガスが入



《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
 (ギター文化館通り)
 看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
 皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
 16:00~18:00
 月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

り、ポットを使ったりし始めた。道路が舗装されたり新しい道が増えた。幼い者は大きくなり、元気だった人は老いた。地域や家庭で中心だった人達は一人去り二人去りしていった。あの頃の活気さや三代(兄弟、従兄弟、再従兄弟)の繋がりは何処へ行ってしまったのか。枯れた木を切る張合いもなく、倒した木を転がす力もなくなった今の俺は、あの頃の親父の年齢だ。親父もこの山へ一人で来るのはきつと辛かったことだろう。そこには支えてくれていたものがあつたんだ。改めてみて見るとさちさんが「しっかりね」といつているようだ。さちさんと観音さまは親父の思いと一体になつてこの山にうずもれていつたのだろう。

爺ちゃんと親父と俺が生活の為に舟をこぎ車で走り新木を取りに来たこの場所は大切な所だ。俺は此処へ子供や孫を一度も連れて来たことがない。「この山はどうなるのだろう」と話を終つた。

お父さんの秘めた思いが観音さまの姿で表現され、風化されて山と一体となつていく。「この山はすてきな場所だわ」とおもつた。

征服の大義・言の章

打田昇三

昔から日本には八百万(やおよろず)の神々がおわすとされてきた。厚かましく「神の子孫だ」となどと称してこの国に君臨した階層もあつたが、悪く言えば征服者の子孫なのであろう。総人口が何万、何十万の単位だつた頃に神様が八百万も居られたのでは人間一人で多くの神様とお付き合ひをする計算になる。下世話な解釈だが一部の者だけでなく、純度の濃い日本民族は誰だつて「神様の子孫」と名乗る資格を持つていた筈だが：

多くの神様の中で一般に知られているのは天照大神、大国主命、武甕槌命、日本武尊、少彦名命、倉稲魂神(お稲荷さん)ぐらいで、大概の人たちは祭神の素性も名前も専門分野?も知らず「神社」「神様」でまとめて雑なお願ひをしている。

宗教絡みでモーゼ、キリスト、マホメッドから釈迦、老子、ゾロアスターなどは有名であるが、戸籍がはつきりしているので偉大な人物であつても神仏には成れない。その辺を誤解して現代は個人崇拜の宗教団体が商売としてはびこり、政治にまで介入しているから世の中が狂うのでは？

日本の神様さえ、ごく一部しか知らないのだから異国の神となると全く見当がつかないけれどもギリシア神話ではバルカン、ローマ神話では「ヘパイストス」と言うエリートの神様が居る。日本の武甕槌命(鹿島神宮祭神)に相当する「火と鍛冶の神様(武力の象徴)」であるらしい。奥さんは美人の代表「ビーナス」である。旦那が格別にゴツイ顔をしていたせいかビーナスは浮気をした：

武神バルカンは、トロイ戦争に向かうアキレスに武器を提供したと言われる。その武器で奮戦中

のアキレスは、生まれつきアキレス腱が弱かつたために踵(かかと)を射られて戦死した。バルカン神が武器と一緒に鉄製の長靴でも作つてやればアキレスは負けなかつたのかも知れないが：

その長靴のような形のイタリアの東側にはアドリア海を挟んで地中海まで突き出た半島がある。現代ではスロベニア、クロアチア、セルビア、アルバニア、ギリシア、ブルガリアなどの国になる。

半島は北東部にある山脈に由来して「バルカン」と名付けられており、名前に負けないように紛争が絶えないところから「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれている。まずローマ帝国に侵略され、民族大移動の影響によるゴート族侵入のほか、スラブ民族が南下居住し、オスマン・トルコとオーストリア「ハンガリー」二重帝国(ハプスブルグ家)に長く支配されていた。イスラム教と二つのキリスト教(カトリックと東方正教)にも惑わされた。

此処は第一次世界大戦の発火点であり、また第二次世界大戦後に出来たユーゴスラビアの民族独立を巡るややこしい紛争地でもある。

一つの国家、二つの文字、三つの宗教、四つの言語、五つの民族、六つの共和国と言われた旧ユーゴスラビアは、僅か北海道の三・三倍の国土で熾烈な内戦を繰り広げ、数々の残虐行為が行われて軍人以外にも多数の犠牲者を出しながら現在でも燻(くも)りが残っている。顧みて我が日本は民族も言語も文字も一つで宗教は勝手次第、余計な共和国も無いのに、優れた指導者に欠けているため混乱している。バルカン半島を笑えない。

バルカン史を見ると、エジプト、メソポタミア、黄河、インダスの各文明が興つた頃の記録は白紙である。ヨーロッパ大陸に繋がる広大な地域であ

るから先史文明の一つや二つは有っても良いと思
われるが全く知られていない。ただ、アナトリア
高原（トルコ）に人類最初の大型集落遺跡とされ
るチャタルホユックが出現する数百年前に、バル
カン半島に農業が伝わり、それがヨーロッパ新石
器時代の始まりとするギリシア史の記録があるか
らメソポタミア文明の影響を受けたことは推定で
きるのだが、それがヨーロッパ大陸に広がったあ
と数千年間のバルカン半島が淋しい…

バルカンはユーラシア大陸から三角状に突き出
た大きな半島で黒海、エーゲ海、地中海に囲まれ
ており、単純に考えれば海山の資源に恵まれ原初
人類の生息には適していた筈である。例えば水産
資源を見ると、地中海からアドリア海に入る海流
は、ゴミだけをイタリアに届けて魚群はみんな反対
側の方に行くのだそう、イタリアではバルカン
沿岸から魚を輸入してイタリアの魚として売って
いるらしい。ところが、バルカン半島には肝心の
漁港が少ない。火山地形の影響を受ける複雑な海
岸線には断崖絶壁ばかりで平野部が殆ど無い。

沿岸部で漁港又は船舶港として開けているのは
北部イタリアに近いリエカと、ローマ帝国中興の
祖と言われる皇帝ディオクレティアヌスの別荘が
あったスプリットくらいである。日本には殆ど知
られていない都市だが、実は日露戦争で日本の海
軍が強敵ロシア海軍に勝利したのはリエカの工場
で製造され緊急輸入された「新型魚雷」のお蔭な
のである。アキレス支援の教訓からバルカン神が
武甕槌命の縁で日本に味方したのであるか？
バルカン半島の北部と東部はドナウ川などによ
りヨーロッパ大陸と結びついてきたから後にハン
ガリー、ルーマニアなどの農業国が誕生すること

になるが、沿岸部（西部、南部）は地形、地質に
加えて折角の地中海性（温帯冬雨）気候の恩恵に
浴すことが出来ず自然条件が過酷だと言つ。

バルカン半島には、一か所で九十二の滝と十六
の湖水を持つ自然公園を始め、地底で七つ繋がる
湖水とか、綺麗な鍾乳洞や景勝地は多いが生存の
ための耕作地や食料資源は極めて少ないらしい。
その恵まれない土地に紀元前の二千年頃、千四百
年頃にかけて内陸地から移動してくる民族が現れ
始めた。後にギリシア系と呼ばれる人々である。

まず序章で述べたようにアリア人が中央アジ
アから西北インド、イラン高原などに進出を始め
た頃に、西へ進んで現在の黒海北部に入った同じ
系統の一派がある。それと前後してネアンデルタ
ール人、クロマニヨン人、グリマルディ人などの
子孫と思われる民族が、果てしない大森林と石の
塊が立ち塞がり農作物も満足に育たないヨーロッパ
に愛想を尽かして南下を始めたと考えられる。

しかしながら折角、来て貰ってもバルカンの台
地に豊富な資源は無いのだから、侵入してきた民
族は勢いに任せて南下するしか道がない。到達す
る地点は奇岩景勝、断崖絶壁、紺碧の海に複雑に
入り組んだ地形と無数の島々の姿が美しいエーゲ
海岸、現在のギリシアである。

多くの史書はギリシアの国土を褒めていない。
「歴史の父」と称されたヘロドトスが「貧困はギ
リシアの伴侶」だと言つたとか、ひどい表現だが
当っているらしく、ギリシア人が苦情を言つた様
子もない。民間伝承には日本の国生み神話のよう
な話があるようで、それによれば「…天地創造の
神がすべての国土を造り終えてから、ギリシアを
忘れていたことに気付いた…」のだそうである。

有難いことに日本は手持ち材料が豊富な時期に
神様が創ってくれたことになるのだが、忘れられ
たギリシアの場合は緑の大地も肥沃な耕地も水資
源も使い切つてから追加製造されたので、神様は
少しの残り土にゴロゴロした岩の塊を砕いて捏ね
始めた。折しも天上には七色の虹が掛つていた。
何か材料が欲しかった神様は、手を伸ばし天上の
虹を外して粉々に砕き、捏ねていた土と岩の粉に
虹粉を混ぜてギリシア国土を完成させた…

紺碧のエーゲ海、一年に三百日は晴れという群
青の空、数え切れない島々、至る所に屹立する岩
礁、巡るさえ容易ではない海岸線と、見る者を魅
了する景観も腹の足しにはならない。苦勞して辿
り着いた土地が、神様の手抜き工事だと気づいた
古代ギリシア系の人々は、余力のある者は舟を漕
ぎ出して各地に渡り、諦めた組の中で運の良い者
は狭いながらも穀物の実る場所を見つけ、大方は
狭い耕地にしがみついて雑草などで飢えを凌ぐ暮
らしを続けたようである。地中海の三大果実とよ
ばれたオリーブ、葡萄、無花果も応援をした。

こうしてアイオリス、イオニア、ドーリア（ド
ーリス）などの名で呼ばれるギリシア系民族は、
ギリシア本土を始めクレタ島、ロードス島などエ
ーゲ海一帯から対岸の小アジア（現在のトルコ西
南部）、さらにはイタリア南部、シチリア島辺りに
かけて小王国や都市国家、百か所を越える植民都
市を建設し独自の文明を築いたのである。

序章で述べたように、金持ち王国の庇護のもと
商売繁盛を誇っていたギリシア人のトルコ支店は
イランに興つたペルシア帝国に押し潰されてゆく
のだが、それ以前にもギリシア人の文明が根こそ
ぎ破壊されたことがあるらしい。これについては

学説でも内容が未だ完全に結論づけられていないように記載されない史書も多い。後から荒らしたペルシア帝国の侵略征服を擁護するつもりは無いが史実なので少し触れておきたい。

バルカン半島を南下して来たギリシア系民族のうち、ドーリア人は少し遅れてエーゲ海岸に到達した。既に他の民族が定着していた場所に割り込む訳だから、強引な手法をとったことは分かるがドーリア人は先住民が築いたクレタ文明やミネ文明などを徹底して破壊したらしく、紀元前十三世紀頃から同八世紀頃までのギリシアの歴史は「暗黒時代」と呼ばれている。(今の日本も各地で似たようなことが行われている…)

同じ頃に「海の民」という謎の武装集団が突如として現れ小アジアから地中海東岸、エーゲ海一帯、さらにはエジプトまでを脅威に曝した。この集団もバルカン半島を下って来たようだが、何処から湧いて来たのか今もって不明のようである。

似ている名前だが、この集団は序章で紹介したメソポタミアの「海の国」とは別である。特徴として「海の民」は牛車に家財道具を載せ、家族ぐるみで、さながら蟻の行進のようにゾロゾロと侵入してくる。新型の武器を持っていた訳でも無く家財道具も「割れ鍋に綴じ蓋」程度のもので電化製品などは懐中電灯も無い。当時の軍事大国はエジプト王国とヒッタイト帝国であったが、海の民は粗末な武器で世界の二大国にも侵入を図った。

彼らの主力は黒海南岸を経由してトルコ北部に進んだ。当時のヒッタイト帝国は「鉄と馬と戦車の国」と言われて、肥沃な三日月地帯辺りの支配権を巡りエジプトの王朝と勢力争いをしていた。そのヒッタイト帝国が白蟻の被害のように国内各

地を海の民に食い荒らされた。最先端の軍事力を持つ国が「吉野屋？」並みの牛と鍋の集団に負けて滅亡に追い込まれてしまったのである。

エーゲ海沿岸に築かれた古代ギリシア系社会でも十数か所が襲われ多くの被害を受けた。さらに牛を船に乗せた海の民は、クレタ島から地中海を東進して現在のレバノン、イスラエルなど地中海東岸の都市を攻め、さらにエジプトへ向かった。

当時のエジプトは、主君のツタンカーメン王を暗殺した重臣が築いた第十九王朝から二十王朝の時代になるが、逆賊王朝でも何とか得体の知れない集団を撃退することが出来た。これにより「海の民」は急速に衰えて自然消滅した。一説によれば海の民の一部が地中海東岸に定着して現在のパレスチナ人になったとする。

エジプト王国の力で海の民は自然消滅をしたのだが、ギリシア人社会には大きな被害が残った。この海の民が、年代的に近いドーリア人の侵入と関係するのかどうかは未だに不明のようである。何しろ被害の大きかったヒッタイトが滅び、ギリシアが暗黒時代になって当時の記録が無い。辛うじて海の民を撃退したエジプトが自分達の手柄として勝利の記録だけを残していたとか：

一方で異民族が侵入した頃には、その地域一帯に火山の噴火と大地震が起こったようでもある。従って一般に伝えられているギリシアの歴史は少し後から来たドーリア人の、或いはドーリア人に追われたか屈伏した先住者イオニア人、アイオリス人、ミケーネ人の後半の歴史である。年代的には紀元前七百年以降のもので、ポリス社会と呼ばれた都市国家と殖民時代のことを中心になる。そもそも「ギリシア」とは何なのか？ギリシア

人の起源については未だに議論が続いているので素人が分からなくても良いと思っっているのだがギリシア語は古代史の解明に重要な不可欠の役目を果たしたらしい。そうなるギリシアは古代世界史の原点になる訳であるから、一応は知らなければ怖い神様のバルカンに叱られる？

歴史の父・ヘロドトスの大著「歴史」も「新約聖書」も、最初はギリシア語で書かれたという。さらにエジプト文明が解明されたのもギリシア語のお蔭なのである。エジプトを征服に行ったナポレオンの軍隊が陣地構築の工事現場から「ロゼッタストーン」を見つけた。クレオパトラの王朝時代に奉納された神殿の碑なのだが「猫に小判」でアラブ時代には皆の石垣に転用されていた。ナポレオンは徴兵制を施行し各地に侵略、征服を続けたから褒める人は少ないが、缶詰の発明とロゼッタストーンの見解は高く評価されている。

ロゼッタストーンには古代エジプトの文字ヒエログリフとエジプトの民衆文字、それにギリシア語で同じことが記録されていた。アレキサンドロス(以下「アレキサンダー」と表記)大王がエジプトを征服し、ギリシア系のプトレマイオス王朝が置かれたからである。やがてフランスのエジプト学研究者シャンポリオンが苦心して三種類の文字を照合しヒエログリフの解読に成功したお蔭で古代エジプトの歴史が明らかになった。

ギリシア語を話したギリシア人はバルカン半島を南下してきた幾つかの古代民族から派生した訳だが、その中で自分たちのことを「ヘレネス(又はヘラス、エラス)」と呼んで純粹のギリシア人だと自画自賛していたのが都市国家(ポリス)を興して割拠していたギリシア人である。彼らは祖先

が「ヘレン」という共通の神様から生まれたと信じていてヘレネス以外の種族を差別していた。

ヘレネスをラテン語では「グラエキア」、英語では「 그리스」と言っただけで、ギリシアの国名は「 Greece」と表記されるほか「 Hellenic Republic」とも書かれる。

厳しい自然条件のなかで多くの都市国家が侵略したり潰し合ったりしながら一方ではヘレネスの名の下にギリシア統一体として糾合し、同じギリシア系の異民族を排斥する。この不可思議な現象・心理から生まれたのが年に一度、戦争を止めてヘレネスだけで競ったというオリンピックである。

したがってオリンピックは世界平和の象徴でも何でも無い筈なのに、各国が莫大な予算をかけて大騒ぎする。何とも不可解ではあるが、近代オリンピックも戦争やら暴動やら天災事変を横眼で睨みながら行なう。考えようによっては、これぞ差別社会ヘレネスの伝統行事なのかも知れない。

ヘレネスの思想、文化芸術、行事習俗など多くのことがらは、アレキサンダー大王の東征によりペルシアなどに齎され、そこでオリエントの文化と融合して世界的・普遍的な「ヘレニズム」として東洋に伝えられたのである。しかしアレキサンダーが「ヘレニズムの元祖」ではあるが、アレキサンダー自身はヘレネスの仲間に入れて貰えない立場、つまり野蛮人としてヘレネスから疎外されていた種族だった。勿論、古代オリンピックにもそのままで出られなかった筈である。

アレキサンダーは「マケドニア」に生まれた。ギリシアの暗黒時代が終わって各地に都市国家が興隆した頃でも「ギリシア」の範囲は地中海からエーゲ海にかけて掌のように突き出た半島と多数

の島々、それに各地に展開する殖民都市に限られていた。ギリシアでもブルガリア、アルバニア、旧ユーゴスラビアなどに接する地域は「バルバロイ」と呼ばれ、異邦人の住む地域にされていたのである。バルバロイは後に「野蛮人」の語源になったらしいから褒め言葉ではない。マケドニアは、バルバロイの中の一つの小国に過ぎなかった。

ギリシアの首都アテネから北上する国道一号線を四〇〇kmほど行くと前方にオリンポス山が横たわっている。標高三〇〇〇m弱の山だから別に珍しくもないが、神々の聖地とされて古代にはエロチックな豊穣祭が行われていたという。古代オリンピックはそのお祭りの行事に過ぎなかった。

ギリシアの主要道路にはヨーロッパのモ付いて一号線を進めば旧ユーゴスラビア領に入るのだが、都市国家時代のギリシアはオリンポス山まで、その先は「マケドニア」「トラキア」などと呼ばれるバルバロイの領域でオリンポスの神々が野蛮人領の前に立ち塞がっていたのである。

二千何百年も経った現代でもギリシア南部やエーゲ海諸島が世界的な名所として知られるのに比べると、北部ギリシアの旧マケドニア、旧トラキアなどの開発は遅れていた。マケドニアにある都市「テサロニキ」は首都のアテネに次ぐ都市で北部ギリシアは古代の交易路が通じる要衝だった。にも関わらず発展しなかったのは観光に頼るギリシアでは「見た目」が第一であった。居住環境には適さなくても、器量良しの沿岸部が目玉であり、観光資源に乏しかった北部は軽視されていた？

北部ギリシアが突如として世界の注目を浴びる観光地になったのはごく近年のことで、ギリシア第一の考古学者による長年の研究成果がアレキサ

ンダー大王の故郷としての価値を再確認させたからである。そのことについては改めて述べるが、それだけの価値があった北部を、現代のギリシアではなぜか昔のまま後進地帯にしていた。

本流だけでも八か国以上を通過するヨーロッパ大陸の大河・美しき青きドナウ川は、西ドイツ南部に発して黒海に流入するのだが沿岸部の百kmほど手前で気が変わったように突然、北上してウクライナ共和国まで遡ってからデルタ地帯を形成している。バルカン半島を縦走するピンドス山脈や横たわるバルカン山脈、ロドペ山脈などの影響である。地図では山脈の東の端が意地悪にドナウの流れを遮って北上させているように見える。

既に述べたように何処からかギリシアにやってきたイオニア人、アイオリス人、ドーリア人などはバルカン半島の中央部及び西部の山岳地帯を避けるようにアドリア海沿岸部を南下したようで、ドナウ沿岸に平野があることを知らなかったか、或いは暴落も予測せずに株などで一儲けを企み失敗する連中のように、農業などの力仕事を嫌ってドナウ流域の耕作地帯には近寄らなかつたか？

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
0299-55-4411

ヘレナスを称するギリシア人は結局、バルカン半島中央部よりも、さらに耕地の少ないギリシア本土や島々に住みつくことになったのだが、自分たちの行動範囲を遮るように聳えるオリンポス山から北の山地を頭から人類の生息出来ない地域と決め付けていた。ところが彼らが野蠻扱いしていた奥地には半島南部に比して肥沃な大地と、ドナウに流入する水量豊かな幾筋もの川があり耕地不足のギリシアにあつては神の意向に背くような異質の地であつた。後には金山も出現する。

その場所は山脈に囲まれていて侵入者には死角となり多民族の流入も防がれた。現在のアルバニアに当る地域のイリュリア人が時々、山を越えて攻め込んでくるのが難点ではあつたが、運よくその地に辿りついたギリシア系民族は本土の連中に「野蠻人」と蔑まれながら独自の文化をつくりあげていた。当時の世界を制覇したアレキサンダーも戸籍謄本を見れば、ギリシア人では無くマケドニア人であることが知られてしまふ。マケドニアとは本当に野蠻国であつたのか？

一般的にはマケドニア地方は紀元前千二百年頃にドーリア人の一部が定着したと言われており、歴史の父ヘロドトスは、理由は知らず紀元前七百年頃にギリシア本土から逆流するようにドーリア系（スパルタ系）の一部族がマケドニアに入ったと言っている。それならば差別される理由はないのだが、北部蔑視は恵まれた地域に行けなかつた南部部族の僻みかも知れない。

ギリシア人が北部を粗末にしていたツケは現代に及んだ。旧ユーゴスラビアが紛争を起こしていた時代には多数の難民がテサロニキ市などに入り込んで治安を乱した。また「マケドニア」という名

称を軽視していた」と思われて、ユーゴスラビアが「それならば！」と「マケドニア共和国」を創つてしまつたのである。ギリシアは慌てて抗議したのだが、旧マケドニアの一部が旧ユーゴスラビア領にかかつていたので文句は言えずギリシアでは無いマケドニアがバルカン半島に出現した。面目を失つたギリシアは国連を巻き込んでマケドニア（名）奪回を図つていた。折衷案でユーゴスラビア側が「ゴルナ（上）マケドニア」と改名することで折り合いがついた筈だが？

古代のマケドニア（以下「マケドニア」と表記）は神の山オリンポスの向こう側になる。手前の平原地帯はテッサリア地方と呼ばれ古代ギリシアの最果ての地である。地形的にギリシアで一番、気温が高くなるのだそうで、「辺境」と言われても仕方無いが、此の地方からは良い馬と綿花を産出しておりアレキサンダーの遠征に従つて命を落とした愛馬「ブケファラス」もテッサリア馬である。そのほか鉱物資源としてボーキサイトが採れる。発電能力の低いギリシアは電気が高いから鉱石は精錬せずに日本に来るのだそうで資源の乏しい日本にとつては有難い地域である。

マケドニアの更に奥地はトラキアで、現在はマルマラ海沿岸部がトルコ領になっている。この地域に住んでいたのはギリシア系とは少し違う民族で非常に戦闘的であつたらしく、いつも戦争をしていたから戦死者も多く出る。必然的に死者を弔う術が発達していた。死者の火葬や、墓石を建てたり供養の塔婆を供えたりするのはアレキサンダーが伝えたトラキア人の風習であつたらしい。

古代ギリシア領のテッサリアとマケドニア領は西側に横たわる異国のエピロス（エペイロス）に

接していた。この国は現在のアルバニア共和国になり、住民はバルカン半島で最古の民と言われている。ギリシア人やブルガリア人との混血は進んでいるらしいがエピロス人は自尊心が高く現代でも「驚の国」と称しているという。

エピロスがローマ帝国に支配される以前の歴史は知られていないが、アレキサンダー大王の母親がエピロス国の王女だとされていて、自尊心の塊のような気位の高い女性だつたらしいから民族性も想像がつく。それもその筈で、アレキサンダーのカアチャンの言葉を信用すればエピロス王家は「踵以外は強かつたアキレスの子孫」らしい。

古代ギリシア人が僻地と考えたテッサリアから更に一種の自然境界で隔てられ、疎外されていた謎の地域がマケドニアであるから、歴史的にも伝えられたものが少ないのは当然である。ギリシア本土のことは多くの史書に紹介されていてマケドニア史の記述は極めて少ない。ヘロドトスも、その著書「歴史」でトラキアやマケドニアのことに触れているが、それはペルシア帝国のギリシア遠征に関わる部分だけである。

幸いに世界中の歴史家、文学者、軍事専門家やジャーナリストなどでアレキサンダーの生涯を書いた伝記（翻訳本）が昭和の後期に小学館から出されていてその中にマケドニアの記事がある。また直接に記述されなくてもギリシア本土のことを書いた他の歴史書などからマケドニアのことが推定できるし、現地で得た情報も貴重である。この原稿はそれらの史料に基づいて書かせて頂く。

ヘロドトスが言つたように、スパルタ系民族の一派がマケドニアに入った年代を紀元前七〇〇年頃とするのは頷ける説である。ギリシアの暗黒時

代が終つて原ギリシア人がギリシア本土からエーゲ海、地中海、小アジアなどに散らばり始めたのが紀元前九〇〇年以降らしいから、一旦はペロポネソス半島に行ったスパルタ系ギリシア人のうちで食欲旺盛な者が、碌な食べ物の無い新天地に愛想を尽かしてオリンポス山の向こうへ逃亡したとしても文句は言えない。その方が賢明だった。

マケドニアは、広い低平な地域と大きな川谷から成り、周囲は森林豊かな高原で円形に縁どられた国土が広がる。オリンポス山の麓からユーゴスラビアとの国境まで三十km程度の地点に及ぶその平地は「マケドニア平原」と呼ばれ、山麓から川の下流まで広がる南部、二筋の川の間で平坦で低湿な農耕牧畜に適した国土の中心部、広々と開放的で肥沃な北東部の国境地帯という三つの地域に分かれるが、いずれも恵まれた土地である。勇士アキレスが登場するトロイ戦争のことを書いた古代ギリシアの詩人「ホメロス」は、マケドニア人のことを「ギリシア人よりも背が高い」と表現しているという。ギリシア人は小柄だった。

マケドニア人が豊かな地で最初からノンビリと暮らしていた訳ではない。この地帯にはライオンが生息していた。かつてトルコの奥地にもライオンが出没し家畜が襲われるのを水牛で退治したと言つ話だが、マケドニアの農民や牧畜従事者も何らかの手段で狼やライオンと戦っていた。野生の牛を飼ひ馴らしたとされるから、ライオンを牛と協同で撃退したのであろうか。

マケドニアには多くの中小王国が存在していたと伝えられているが、王国と言つても部族程度だと思われる。紀元前五、六百年代に王家の歴史を創り出したのはアルゲウスという家系の流れを汲

むと称する「ベルデツカス」という人物である。この名前は、アレキサンダー大王の遺言を聞いた同族の側近？と同名であるから整合性はある。

アルゲウス家はギリシア神話で最も有名かつ最強で怪奇な伝説を持つヘラクレスの子孫だと称していた。ヘラクレスは、オリンポスの主神ゼウスが人妻と密通して生ませた子で、父親には大事にされたが本妻のヘラには徹底的に祟られた。ライオン退治、大蛇退治、牡牛生けどりなど多くの伝説を持つ。「ライオン退治」「牡牛生けどり」が入植当時のマケドニア開拓者の苦勞と重なるので「神の子孫」はコジツケであろうが、日本にも例があるから国際的？に否定はできない。

半分は嘘を覚悟で、アレキサンダー大王に至るマケドニア王家の家系を勝手に整理してみると、神話の英雄ヘラクレスから後の三代は名前が分からない。五代目がベルデツカス一世で六代目はアミュンタス一世、次がアレクサンドロス（アレキサンダー）一世であるが、この王の死後に家系が混乱する。後に東方に遠征してアケメネス王朝へルシア帝国などを倒すアレキサンダー大王は三世になるが、事実上の始祖であるベルデツカス一世からすると、かなり傍系の人物になる。

さて、同じギリシア系の民族なのに「奥地に住んでいた」と言っただけで野蛮人扱いをされてきたマケドニア人は、部族社会の時代から抜きん出て他の部族を抑えたベルデツカス一世により、小さいながらも王国が形成されてギリシアのポリス（市民共同体都市国家）に対抗できる迄になった。ところが「ふるさと“風”」前号の序章で述べたように、イランの地に興ったアケメネス王朝ベルシア帝国が西へ進んで現在のトルコを支配した。

当時のトルコ西部にはリュディアと言つ世界一の金持ちの国があり簡単には負ける筈が無かったのだが、中身の乏しい国は平成の世界大恐慌と同じで一瞬にして没落し、リュディアに軒を並べていたギリシアの出店が大きな影響を受けるようになってしまった。政治家が幾ら偉そうなことを言つても収入がなければ国民は生きていけない。

一部には抵抗もあつたが、出先のギリシア人は生活のためにベルシアに屈した。それでなくても農地、食糧、資源などが少ないために確実に稼げる手段として大國の傭兵になるギリシア人も多かつた。当時の大國はベルシアとエジプトである。

その二大國のうち、当時のエジプトはアッシリア軍に攻め込まれた後の混乱が続いていたが、強敵を追い出したのはギリシア人の傭兵隊である。ベルシアのほうにはキュロス大王が着々と勢力を広げながらも、その占領地などへ忍者集団並みに出没する北方騎馬民族に手を焼いていた。

広大なユーラシア大陸には農耕に適した森林や草原と共に多くの乾燥地帯がある。何らかの事情でその地域に住むようになった人類は、古代から遊牧民となり農耕民とは一線を画した生活を続けていた。ドナウ川東岸からロシアのアルタイ山脈にかけて東西に伸びる地域にはボルガ川、オビ川などの流域を含めて「アンドロノヴォ文化」と呼ばれる遊牧民特有の文化があるとされる。

初めのうちは自分たちの領域で平和的な生活を送っていたと思われる遊牧民も、金属器が伝わり必然的に騎馬遊牧民に変わり、部族間の対立や周辺に割拠する王国との摩擦が目立つようになると機動力を駆使した強力な戦闘集団に変わる。

黒海の北岸一帯は遊牧騎馬民族の本場であり、

騎馬民族同士の争いからメディア、ペルシア、リュディアの領域に没するようになった。ヘロドトスは、喧嘩していた騎馬民族が道を間違えて侵入したことを記録している。キュロス大王はこの目障りな騎馬民族に対して特に神経を尖らせた。国内のことは息子に任せ、征服したリュディアの王クロイソスを案内者にして討伐に向かったことは前号の序章で触れた。

当時の代表的な遊牧騎馬民族は「スキタイ」と呼ばれる人種で、幾つかの種族に分かれていたがその中で東方のカスピ海付近に本拠を置いた「マツサゲタイ」は勇猛で人員数も多かった。新パピロニア帝国やリュディア王国を滅ぼしたキュロス大王は、マツサゲタイを服属させようと考えた。

ヘロドトスは、キュロスが奥地まで出かけてマツサゲタイを相手にした理由を「自分は普通の人間では無く神に近い超人である」という信念。序章で述べた出生の経緯と数奇な運命を生き延びた奇跡による自信に基づいたもの」としている。

キュロスの思い込みで狙われたマツサゲタイは王国制をとっていたが、その頃に王が急死してしまい、未亡人のトミュリスが自ら女王として一族を統括していた。キュロスは、騎馬民族を率いる女王に興味を持ち、勝手に若くて美人だと決めて遠征の前に使者を送りプロポーズをした。

マツサゲタイの本拠地は黒海とカスピ海との間にあるコーカサス地方と伝えられる。求婚されたトミュリス女王は、女性の立場からは悪い気がしなかったのだが、顔を洗ってから「馬と一緒の野性的な暮らしをしている自分に、売り出し中の大王が求婚する訳が無い」と気付いたのである。キュロスの狙いはマツサゲタイ王国……

丸付きで×印の回答を受け取ったキュロスは直ちに兵を集めコーカサス侵攻の準備を始めた。コーカサスへ攻め入るには大きな川を越えなければならぬ。準備には時間がかかる。その間にトミュリスは次のようにキュロスに警告した。

「大王よ！今、あなたが進めている渡河の準備などは直ぐ止めなさい。それがあなたの為にならないことを忠告する。あなたは自分の領土だけを治めていれば良い。しかし、どうしても忠告を聞かずに、我らマツサゲタイと戦いたいののであれば橋を架けるような面倒なことをせず、二つの方法から選びなさい：我らは領土内で川岸から行程三日の距離まで退く（渡河の妨害はしない）。その間に軍勢に川を渡らせて我が領内に入られよ。我らは其処で戦う：もしペルシア領内で我らを迎え撃つと言つのであれば同じようにして貰いたい……」

キュロスは使者の言葉を聞き、重臣たちを集めていづれの方法でマツサゲタイと戦うべきかを協議させた。重臣たちの意見は地理に詳しいペルシア領内での戦いを主張したが、それに対してキュロス大王の顧問のような形で従っていたクロイソス（降伏したリュディアの王）が反対した。

「国王：私は神の御心によつて貴方に従つた上はアケメネス王家の不利になることは申し上げないつもりです……もし国王が、御自身の軍隊も王と同じように不滅であるとお考えならば私の心配も無駄になるのですが……王に号令される兵士たちは人間ですから、運不運がつきまといます……その場合のことを考えておく必要があると思つたのです。」

私はマツサゲタイ侵攻について皆さんとは反対の意見です……もし敵を領内に入れて戦つた場合、万が一、最初の戦闘で敗れただけで領土全体を敵

に奪われる恐れが生じてきます。また敵地での戦闘でも、負けて退却などということになっては大王の御名に傷がつくこととなります。」

私が聞きましたところ、マツサゲタイでは食事なども極めて貧しいとのことですから、警沢を知りません……そこで向こうの領地での戦闘を申し入れてから、我が陣営に酒と料理を沢山に準備し、僅かの兵力（それも一番に弱い部隊）のみを配置して主力は川岸まで退きます。敵は必ず食物に引き寄せられて陣営にやってくるでしょう。そこを本隊が襲えば勝利は疑いないと存じます……」

キュロスはこの案を採用してマツサゲタイ領内での戦闘を女王トミュリスに申し入れた。約束どおりマツサゲタイは退いていった。キュロスは、息子のカンビュセスにクロイソスを預けて大切にするように言い聞かせペルシアへ戻した。

クロイソスの献策が実行され、料理と共に陣営に残されたのは少数の非戦闘部隊であつたから敵の襲撃に叶う筈がなく、抵抗する者は殺された。マツサゲタイ軍は、見込どおりに酒と料理に飛びつき戦場であることを忘れた。そこをペルシア軍の主力が急襲して多数の戦死者と捕虜を出した。捕虜の中には女王トミュリスの息子も居た。

このことを知つたトミュリスはキュロスに使者を送り「酒で誑かしてマツサゲタイ軍に勝つても思ひ上がるな！」と警告してから「速やかに息子を釈放して国へ帰る」ように申し入れた。そして「もし、そのようにしなければ、神に誓つて血に飽くなきそなたを血に飽かせる！」と宣言した。

勝利を確信したキュロス大王はトミュリス女王の口上を無視したのだが、捕虜となつていたマツサゲタイの王子は十分に飲んだ酒の酔いが醒めて

から自分の置かれた立場に気付き、キュロスに頼んで縄を解いて貰うと自殺してしまった。

息子の死を知った女王は、直ちに全兵力を集結させてペルシア軍の陣営に殺到した。歴史家ヘロドトスが「外国人同士が戦った数ある合戦の中で最も激烈なもの」と評したこの戦闘では、双方の軍勢が長期間に亘って退かず、矢が尽きると槍と短剣をもつての殺戮を繰り返した。双方で死力を尽くした末に、最終的にこの戦闘で勝利したのは騎馬民族のマッサゲタイ軍であった。

ペルシア帝国軍の大部分が撃滅され、キュロス大王も戦死した。トミュリス女王は革の袋に戦死者の血を満たしてキュロスの遺体を探し回った。息絶えて横たわるペルシア王を見つけた女王は、その場で首を斬り落として言った。

「私は生き永らえてそなたとの戦いに勝ったが所詮は謀略で我が子をつらえたそなたの勝ちさあ、約束通り血に飽かせてやろう。」

キュロス大王は治世通算二十九年で戦死した。マッサゲタイの女王トミュリスは、キュロス大王の遺体に死者の血を十分飲ませからペルシアへ送り返させた。古代オリエント学の立場からはキュロスの死に関わるヘロドトスの記述が正確ではないとしている。騎馬民族との戦いで戦死したことは事実らしく、トミュリスは遺体を香料詰めですり返したようである。その方が女王らしい。数奇な運命を生きた大王は前号序章で述べたように、ペルシア人の故郷であるパサルガダエに葬られた。ペルシア帝国アケメネス王朝の創始者キュロス大王の後は長男のカンビュセスが継いだ。カンビュセス二世（アケメネス王家の過去にカンビュセス一世が居た）は父親の葬儀を済ませる

とエジプト遠征に乗り出した。キュロスが騎馬民族に敗れて戦死したのは北のほうだから、南下してエジプトを攻めるのは筋違いのように思うがヘロドトスは、その理由を幾つか述べている。そのことは次章で触れるが、ギリシア本土の奥地で疎外されていたマケドニア王家がやつと力をつけ始めた頃、ペルシア帝国と騎馬民族の所為で興隆にストップをかけられる。しかしマケドニアに影響を及ぼしたのはカンビュセス二世ではなかった。この王様は張り切って出かけたエジプトから生きて帰ることが出来なかったのである。

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）
詩を手話で舞う「朗読舞教室」（講師：小林幸枝 白井啓治）
エッセイ教室（講師：白井啓治）
朗読教室（講師：白井啓治）
（各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円）

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当：白井)
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。

ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年6月で4年目を迎えます。ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会月末(最終土曜日)に勉強会を行っております。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「風の会」 URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

よく「古き良き時代」ということが言われる。

しかし、私はこの言葉が大嫌いである。自分にとって良き時代とは、今であることが重要だからである。特にこの言葉を今、現在の世、社会を無責任に否定したり、嘆いたりする意味で使われると、それこそ金属バットでそいつの脳天を叩き割ってやりたいような、過激な感情が生まれる。

過去を懐かしみ、その時代の文化を大切に考える事は重要なことである。しかし、暮らしに関して、現在の世の実相を嘆き否定するような使い方をされるともう駄目なのである。私の裡の真ん中に立つてある、重く太い石柱がドデンと倒れ、過激な感情になってしまふ。許せないのは、大した歳でもないくせに俺達の若い頃には、俺達の餓鬼の頃はなどと口にする奴である。

現状をいろいろと批判し、より希望のある明日を志向しての嘆きの言はいくら言っても構わないと思つし、それこそ大切なことである。しかし、嘆く現状というのは自分達の少し遡つた過去の考えや行動の原因とした結果なのである。このことを忘れたり、考えなかつたりした嘆きの言には反吐が出る以上に腹が立つ。

良きにつけ悪しきにつけ現在の状況というのは、どのぐらい遡るかは別にして過去を原因としての結果である。一生懸命に自分の未来に向けての行動を取らなかつた者ほど、昔は良かったという。自分の未来に向けての行動を一生懸命に行った者は、描いた理想には届かなかつたが、昔より今の方がはるかに良い時代だと口に出ることが出来る。今の時代の方がはるかに良いと言つと、若い奴

らに迎合して等とも言われる。しかし、今より三十年前の方が良かったというのは、三十年前にあなたは何もしなかつたからだと言言できる。

この「ふるさと風」も今回で36回を迎え、3年となった。3年前には、地元では殆ど見向きもされなかつた会報であつたが、3年を迎える最近では、ポツポツではあるが地元の方からお電話を頂けるようになった。スタートしたちよつと昔より遙かに嬉しい現状である。会員の人達のふるさとの文化を大切に明日に希望を持つと行動を始めた原因の結果である。

白井さんは結構過激だね、と言われもしたが最近ではそんな声もあまり聞かなくなつた。私にとっては3年前よりは今の方がはるかに素晴らしく嬉しい状況になつた。だから当然であるが、会報のスタートする昔よりも今の方がはるかに良い、と断言できる。

信念に近い個人的感情ではあるが、良き時代とは古きではなく今である。古き時代の文化は大切に保全に心がけ、明日の良き時代を築くべく今日の時を良い原因にしたいものである。

些か説教じみた話になるが、自分の今日の暮らしというのは、明日の良い結果を生み出すための原因となる暮らしでなければならぬ。

これはもう又かと思われるほど書いてきたことである。石岡に越してきた当初、歴史の里とは言つけれど歴史では飯が喰えん、という馬鹿な話を聞かされた。千三百年の昔、此処に国府がありましてたという年号の空暗記の歴史では、当然のことであるが飯など喰わせてはもらえない。歴史で飯が喰えるというのは、文化としての歴史の知恵を大切に扱つた時に、生活の知恵としての歴史が暮

らしを創つてくれるからである。

親は諸白子は清水、なる伝説物語としての暮らしの知恵を踏みつぶし、忘れ去ってしまった中には暮らしを立てる生産がなくなつて当然である。歴史で飯を喰わなければならぬのに、文化としての知恵である歴史を捨て、年号の歴史だけを残して、飯は喰えんとは何たる莫迦野郎達だ。そして拳句の果てに、昔は良かった「古き良き時代」とは何たることか。古き良き時代とは、伝承される文化の中にのみ言つてもらいたいものである。

しかるべき故(理由)をもつた郷だから「故郷」と言い、十世代にわたつて口に伝えるもののある里だから「古里」と言つのだという。こじ付けの理屈であるが、笑い飛ばせない。歴史でこそ飯が喰えることに早く気づき、文化としての歴史を保全し、今こそ良き時代と誇れるふるさとにしたいものである。

編集後記

記念すべき三十六号となりました。何だ、まだ三年じゃないか。というご意見もあるのかと思ひます。でも、毎月誰も脱落者なく続けてこられたのは、自我自賛でもやっぱり凄いことだと思ひます。今後もよろしくお願いいたします。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

URL:<http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第14回定期公演

常世の国の恋物語百：第21話

小町艶麗なる心歌

6月21日（日曜日）開演午後2時

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に
（古今集）

絶世の美女と称せられ、日本各地に伝説を持つ小野小町。この常世の国にも数多くの伝説を残し、墓も残されている。旧八郷町小野越の北向観音には、悪性の皮膚病に罹った小町が菩薩様と霊石の疣神に祈りをささげたところたちどころに治ったという伝説が残されてある。この地の小野越の名は小野小町が峠を越えたことから名付けられたという。

今回は、古今集に収められている小町の歌14首の朗読舞を軸に常世の恋風をお届けいたします。

脚本：演出 白井啓治 出演（朗読）しらみひろぢ
美術（背景画）兼平ちえこ （舞技）小林 幸枝
（装美）小林 一男

入場料3,000円（前売券2,500円）

前売券は、ギター文化館 0299-46-2457 いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35
0299-24-2063 fax0299-23-0150

ギター文化館発「ふるさと文化市」

**自分達の暮らすふるさとについてもっと主体的に考え風土に培われた文化の力で、
人の流れを創造しよう!!**

自慢すべき美しいふるさと。この美しいふるさとに今欠けているものは、人の流れを創造しようとする知恵と情熱ではないでしょうか。この度、ふるさと常世の国に新しい人の流れを創造しようと、ふるさと自慢を大声する仲間が集まり、「ふるさと文化市実行委員会」を設立いたしました。ふるさと文化市実行委員会では、ギター文化館を発信基地として朗読舞劇「常世の国の恋物語百」に挑戦することば座の定期公演日に、ギター文化館様のご協力を頂き、駐車場にて「ふるさと文化市」を開催いたします。ふるさとの素晴らしい風景の中に楽しいひと時を過ごしませんか。ふるさと文化市実行委員会では、幅広く参加者・参加団体を募集しております。

21年度第2回ふるさと文化市は、6月21日に開催いたします。

詳しくは下記ふるさと文化市実行委員会までお問い合わせください。

代表世話人：松山有里 0299-44-3558、